

腎移植

自分の腎臓の働きが悪くなってしまった場合に、新たな別の腎臓を手術で体の中に入れる治療です。

腎移植は、腎臓が悪くなってしまった時の唯一の根治療法ですが、新たな別の腎臓の提供がないと行えない治療です。

腎臓の提供のされかたによって以下の2種類の方法があります。

生体腎移植：ご両親・祖父母などのご親族から腎臓を1個提供いただいて行う方法

献腎移植：「脳死後または心停止後の方で、生前に書面で本人の臓器提供の意思がある方」もしくは「本人の意思が確認できない場合でもご家族の承諾がある方」から腎臓をご提供いただいて行う方法

【移植までの流れ】

移植手術は、やろうと思ってもすぐにできるわけではありません。

・移植施設

小児の腎移植は特殊な手術ですので、行うことができる施設が限られています。

おかけの施設で移植ができるかどうかを確認しましょう。

おかけの施設で小児の腎移植ができない場合には、移植を行う施設を主治医と一緒に決めます。



・移植の説明

移植施設が決まったら移植施設の受診予約を行い、移植施設で説明を受けます。

おかけの施設で移植ができる場合には、実際に移植をする医師（移植医）の説明を受けます。



- ・移植ができるかどうかの判断

腎臓が悪くなる原因となった疾患が治りきっていないと判断された場合には移植を行うことはできません。

移植手術を安全に行うために、念入りに検査をして移植が可能かどうか判断します。検査は数週間入院して行う場合があります。検査の結果問題が見つかった場合には、問題を解消してから移植手術を行います。

移植をしたあとに、もとの病気が再発する場合があります。再発のしやすさや再発を予防するための治療などに関して、説明をうけてください。

生体腎移植の場合血液型が異なっても移植は可能ですが、移植の前に別の治療が必要になります。

【移植後の注意点】

移植手術後の入院期間は1～2か月ですが、手術後の経過や合併症などによってもっと長くかかる場合があります。

- ・拒絶

移植後は拒絶反応を予防するために、複数種類の免疫抑制薬を毎日決まった時間に飲み続ける必要があります。拒絶反応が起きた場合には入院して治療を行いますが、治療をしても腎臓の働きが回復しない場合もあり、最悪の場合には透析が必要になります。

- ・感染症

免疫抑制薬を内服しているため、移植後は普段かかりにくいウイルス感染症にかかりやすくなります。感染が重症化したり免疫抑制薬の調整が必要になりますので、発熱した際には必ず移植施設に連絡して診察を受けましょう。

- ・悪性腫瘍

移植後にEBウイルスの感染症にかかると、リンパ球という細胞が増えて悪性リンパ腫と呼ばれる悪性腫瘍が発生することがあります。その場合は免疫抑制薬を減量し、抗腫瘍薬で治療を行います。

- ・予防接種

接種を希望される場合には、必ず主治医にご相談ください。

退院後は定期的に外来に通院し、免疫抑制薬の調整や移植腎が正常に働いているかどうかを採血検査で確認します。

また、腎生検をして拒絶の有無や免疫抑制薬により腎臓が痛んでいないかを確認します。